

水生生物の分布，生態調査 - アユ冷水病実態調査

宮本 敦史

目的

近年，全国的に問題となっているアユの冷水病は，養殖場だけでなく河川等自然水域でへい死が発生するという点でこれまでの疾病とは違った対策が求められている。本調査では，河川における冷水病発生要因として強く疑われる放流アユ種苗自身の保菌状況および放流後漁獲されたアユの保菌状況を把握することを目的に，放流アユ種苗の保菌検査を行った。

方法

県内の1漁協が放流する種苗のうち，湖産種苗1業者1ロット，人工産種苗3業者3ロットの計4ロットを検査対象とした。各ロットについて，河川への放流直前に種苗輸送車の水槽からそれぞれ40～60尾ずつを無作為抽出したものをサンプルとした。漁獲魚は，漁協から提供のあった友釣りで漁獲されたアユ10個体をサンプルとした。いずれも99%エチルアルコールで固定して保存したものを検査に用いた。検査はPCR法で行い，鰓の左第一鰓葉の一部を摘出し，放流種苗は10個体分を1検体，漁獲魚は1個体分を1検体とした。PCR検査の詳細は，アユ冷水病対策研究会で定められた方法に従った。

結果

検査を行った4ロットのうち，人工産種苗2ロットで保菌魚を確認した。漁獲アユからは保菌魚は確認されなかった。これまでの検査結果から，放流アユ種苗では毎年保菌魚が確認されており，放流種苗が河川への冷水病原因菌の継続的な供給源となっていることが示された。このことから，河川における冷水病の発生を防ぐ手法として，冷水病原菌を保菌しない種苗を放流する必要性が認められた。一方，友釣りで漁獲されるアユからの冷水病検出率は低いものの，アユ漁解禁後に淵で数十尾単位でアユの斃死個体がみられたり，瀕死のアユが川を流されてくることが認められたことから，河川において小規模な冷水病による斃死が発生しているものと推測された。

表1 アユ冷水病保菌検査結果

種苗の由来	検体数	陽性検体数
湖産種苗1	4	0
人工産種苗1	6	0
人工産種苗2	4	1
人工産種苗3	4	1
漁獲アユ	10	0